

紡出しつゝある絹絲の一端を取り、急に牽引すれば、牽引力は更に内部に及ぼし、通常場合に比し著しく内方迄液状絹を纖維化せしむる事を得。

(永澤六郎)

雜 錄

●マンボウの「オーサゴリシコラ」

前々號に、マンボウの「ペンネラ」に就て記したる場合同一のマンボウに於て、*Orthagoriscicola* 及 *Philothragoriscus* を得たることを述べ置きたり。

Orthagoriscicola は宍戸氏が『動物學雜誌』第百十三號に *Iucunargus muricatus* KROYER として報告したるものに、余の標本も宍戸氏の觀察したるものと同一種なるが如し。故に茲には、同氏の記載に漏れたる數點、及同氏及スコット記載圖畫と多少相違せる點などを記述するに止むべし。

分離せる第一及第二胸節の中、第二の方遙かに第一より幅(左右の)狭く、且つ第一は左右兩端鋭く尖れど、第二節は鋭く尖ることなし。尙ほ ANDREW SCOTT の圖せる *Orthagoriscicola muricata* に比するに、二個の分離胸節の前後の長さは、余の標本の方かなり著しく小なり。THOMAS SCOTT は *Orthagoriscicola* 屬の標徴の一として、小觸角の三節より成ることを擧げしも、余の標本

にては、小觸角は實際四節より成れり。尤も外面より明かに見ゆるは三節のみにして、最初の小なる一節は頭部前側縁の凹所に埋没せり(註一)。外面に現はれたる三節の中、基部の一節は最も太く且つ長大にして、それ自身にて優に他の二節に比敵し、末節は最小にして細し。尙ほ基部の大節は末端太くなり、此部に短くして鈍端を有する多くの棘狀突起あり(圖一)。小觸角は外部に現はれたる部分のみにて長さ約二耗あり。

(註一)宍戸氏も觸角(小觸角を意味するならん)は小さく四個の短き關節より成る』といへり。

大觸角は小觸角に比して著しく太く、先端は鈎狀をなして蟲體の内後方に向へり。

大顎は長くして針狀をなし、基部太くして先端細く、體の正中線に沿ひ縦に後方に向て位置す。其の先端には斜に位置せる稍菱形の開口あり。此の開口の周圍には極めて微細なる齒狀突起を認む。

第一顎脚(圖二)は細くして三節より成る。末節は鈎狀をなし、其の凹側には櫛狀突起あり。此の突起は節の末端に近づくに従ひて漸次に大となる。中節の末端には、一側に乳頭狀突起、他側に棘狀突起あり。何れも微細なる毛を以て被はる。スコットは此の棘狀突起をば圖せしも、乳頭狀突起をば逸せり(註二)。

(註二) "The British parasitic Copepoda," Vol. II, Pl. XXVIII, fig. 12, 1913. 或は實際有せざりしものか。

第二顎脚は稍大觸角の如き構造を示し、末節は強大に

(雜 錄) ○マンボウの「オーサゴリシコラ」

して簡單なる鈎をなす。其の先端は内(少しく前)方に向へり。末節に接する一節は太くして、其腹面には數個の餘り長からざる棘狀突起あり。其中、末節に近き部に在る者は先端鈍なり。

胸脚は一見 Pleopods の如き觀を呈し、先端總て二枝

をなす(註三)。胸脚は總て四對あり。

前方の者より後方の者に至るに従ひ

次第に大となる。殊に前方の二對(就

中最前の一對)は頗る小なり。第一

及第二對の内外二枝はそれ／＼二節

よりなる(註四)。第一對の枝は細くし

て棒狀なり。内枝の方外枝より短し。

各枝の先端は微細なる粒狀突起にて

被はる。外枝には數個の短き棘狀突

起あれど、内枝には之なし(註三)。第

二對は第一對より稍大く、各枝殆ど

同大なり。枝の末節は大にして葉狀

をなし、縁邊には僅數の短き棘狀突

起、表面には微細なる粒狀突起あり。

縁邊は平滑ならずして、多少不規則

に凹凸せり。尙ほ protopodite 及枝の基節には、低度の

レンズにて擬複眼狀構造を示す數個の稍大なる圓頭狀突

起あり(註五)。第三及第四對は著しく大にして、各枝及び

protopodite 何れも葉狀をなし、大體の構造互に相類似

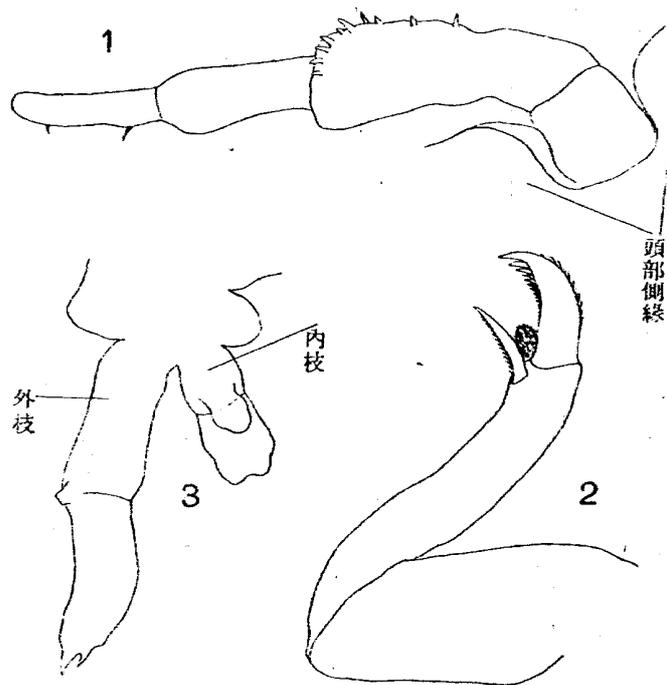
す。各枝は前掲の二對に反し唯一節よりなる。

(註三) 穴戸氏は之を橈脚と書せり。

(註四) 第一對に於ては二節の分界餘り著しからざる事あり。

(註五) 類似の突起は第一對の胸脚にも存在す。

二個の完全なる標本に就ての測定左の如し(註六)。



第一圖。小觸角(三十倍)。
第三圖。第一胸脚(三十倍)

第二圖。第一頸脚(三十倍)。

體長	標本(I)	標本(II)
一六・五耗		一五・五耗
Carapace の長さ	五・〇	五・〇
同じく幅	七・五	八・〇
Carapace の後端と第三胸節の前端との距離	一・五	一・五
第三胸節の背板の長さ	七・〇	七・五
同じく幅	九・〇	一〇・〇
Genital segment の背板の幅	一一・〇	一一・〇

(註六) 余は雄の標本を得ざりしにより、以上の記載及測定は何れも雌に

就て爲されたるものなり。

余の標本は大體に於て穴戸氏及スコット(父子)の記載圖説と一致する故、之等を總て同一種と看做し、*Orthago-*

oriscicola muricata (KRÖYER) と同定すべし(註七)。

(註七) *Laemargus* なる屬名は一八三七年 KROYER に依て制定せられたるものなれど、之はその少し前(矢張同年なるも) HENTLE に依つて既に魚類の屬名に用ひられたるものなればとて、一九〇二年、Poche は之を *Orthogoriscicola* と改めたり(スコットに據る)。

本種の分布は頗る廣し、目下知られある分布區域は左の如し。

日本。歐洲の諸海。南アフリ加。ニュー・ジールランド。北米の太平洋及大西洋岸。

(尙 *Philorthogoriscus* に就ては、他日又更めて報告するの期あるべし。
Orthogoriscicola の全體圖は、前出『動物學雜誌』第九十一頁に矢野氏の掲出せられたるものあれば、茲には之を略す)。

(石井重美)

●肥大吸蟲の構造に關しての訂正及追加

余は本誌第三百十七號に於て肥大吸蟲 *Fasciolopsis busckii* の構造を記載したるが、其中に此種の陰莖囊の存在を疑ひたり。其後臺灣中川幸庵氏の厚意により同地豚より得たる數個の標本の寄贈を受けたるを以て充分に其構造を検するを得たり。主なる部分を摘記すれば次の如し。

(一)陰莖囊は明に存在す。され共其構造はオドローネル(一九〇二年)の記載と異り、囊壁は一般に生殖輸管に密に接近し居り、殊に貯精囊及其附屬育囊を圍める部分には其間に殆んど間隙なし。末端に近きて攝護腺部の附近に至りて兩者の間に多少の空隙を生せるを見る。射精管

には明かなる棘あり。

(二)體の腹面には密接せる鱗狀棘あり。背面には全く是を缺く。

(三)排泄囊は最も異なる構造を有す。即ち正中管より數對の側枝を出せる外體前部に於て一の腔をなして口腹兩吸盤を全く圍繞せり。又皮下には網狀の腔所あり。

以上の構造は益其 *Fasciola* 屬に親縁なき事を證し、殊に排泄囊の構造は *Echinostomidae* に近きを示せり。口吸盤小にして腹吸盤に後方に膨出部ある事も亦 *Echinostomidae* に例あり。其他の構造皆 *Echinostomidae* の性を具ふ。唯是と異なるは食道の壁がクチクラよりなりて上皮を有せざる事なり。口邊に隆起なくして又棘列を缺けども是は *Echinostomidae* 中にも是を缺ける種あり。恐らくは此科の一異型と見らるべきもならん。詳細なる報告は他の種と共に將來公にすべきも、兎に角前回の訂正をなす事上の如し。

(小林晴治郎)

●近江國龍華村の化石哺乳動物群

同地方産の化石哺乳類として先には「ステゴトーン」(NAUMANN:—“Ueber japanische Elephanten der Vorzeit”; “Paleontogr.” XXVIII, 1882) あり、近くは比企忠氏の水牛 (“Bubalina Remains from the Province of Omi”; “Mem. Coll. Engin. Kyoto Imp. Univ.” I, 1915) あり。